

上の原 8 号墳

昭和62年 7 月

宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

序 文

宇都宮市大谷町に所在する「上の原古墳群」は、本市の西部地区を代表する古墳群です。

宇都宮市教育委員会では、昭和56年本古墳群内に東京電力株式会社が変電所を建設するにあたって、同社と協議し古墳2基を保存するために建設計画を修正していただいた経緯があります。

今回、発掘調査を実施した「上の原8号墳」は、その墳丘が完全に削平されていたため存在を確認できなかった古墳でしたが、耕作中に石室の一部が露出し発見されたものです。当教育委員会では、土地所有者と現状保存を含めて8号墳に対する協議を重ねた結果、記録保存を目的とする発掘調査をすることに決定しました。

調査は、当教育委員会が主体となり、国及び栃木県の援助を受けて実施したものです。

本報告書は、築造当時の姿をほとんど失ってしまった古墳の記録ですが、この地区の古墳としては最初の調査記録であり意義あるものと考えられます。

末文になりましたが、調査にあたって御指導いただきました本市文化財保護審議委員会委員の 埴 静夫・大金宣亮・橋本澄朗の3先生方及びなにかと便宜をお図りいただきました松島 清氏（大谷町1630）に対しまして厚くお礼申し上げます。

昭和62年7月

宇都宮市教育委員会

教育長 後 藤 一 雄

例 言

- 1 本書は、宇都宮市大谷町1655番地に所在する「上の原8号墳」の発掘調査報告書である。
なお、巻末に同墳の隣接地で採取した「石器」についても掲載した。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり昭和62年1月10日から同年3月3日まで実施した。
- 3 本調査は、宇都宮市が国及び栃木県から補助金の交付を受けた補助事業である。
- 4 本書の執筆・編集は、下記を除いて定岡・赤石沢があたった。
 - ・ IV 出土遺物（縄文土器→宇都宮大学学生 津布樂一樹，土師器・須恵器・玉→梁木）
 - ・ 付 上の原8号墳付近出土の石器（宇都宮大学学生 津布樂一樹）
- 5 図面の作成には、上野とも子氏及び宇都宮大学学生 津布樂一樹，大正大学学生 矢板真雄の協力を得た。
- 6 本調査の関係者は次の通りである。

指導助言者	宇都宮市文化財保護審議委員会委員	埴	静夫
	同		大金 宣亮
	同		橋本 澄朗
事務局	宇都宮市教育委員会社会教育課		
	課 長	塚田 隆一	(調 査 員)
	文化振興係長	小林 錦一	文化振興係 定岡 明義
	文化振興係	渡辺 卓	同 梁木 誠
	同	斉藤 全男	同 赤石沢 亮
	同	手塚 英男	同 大塚 雅之
	同	小松 俊雄	同 神野 安伸
調査補助員	池田 友保	大塚 清	小林 マサ 小林 ミキ
	小松 寅雄	斉藤 イク	川津みつえ 佐藤 光子
	島崎 熊夫	半沢 ミネ	福田 カネ 福田貴久栄
	福田 タイ	福田 タイ	堀田 一夫 松島 久子
	松本 トシ	松本 トリ	味野和テツ 味野和紀子
	谷中 一郎	吉沢キミイ	吉沢 良助

なお、上記指導助言者のほか、栃木県立博物館自然課の荒川竜一氏，同人文課の上野修一氏，栃木県文化振興事業団の塚本師也氏，前宇都宮市文化財保護審議委員会委員 小堀時蔵氏及び宇都宮市文化財調査員 高山伝治氏に御教示いただいた。記して謝意を表す。

目 次

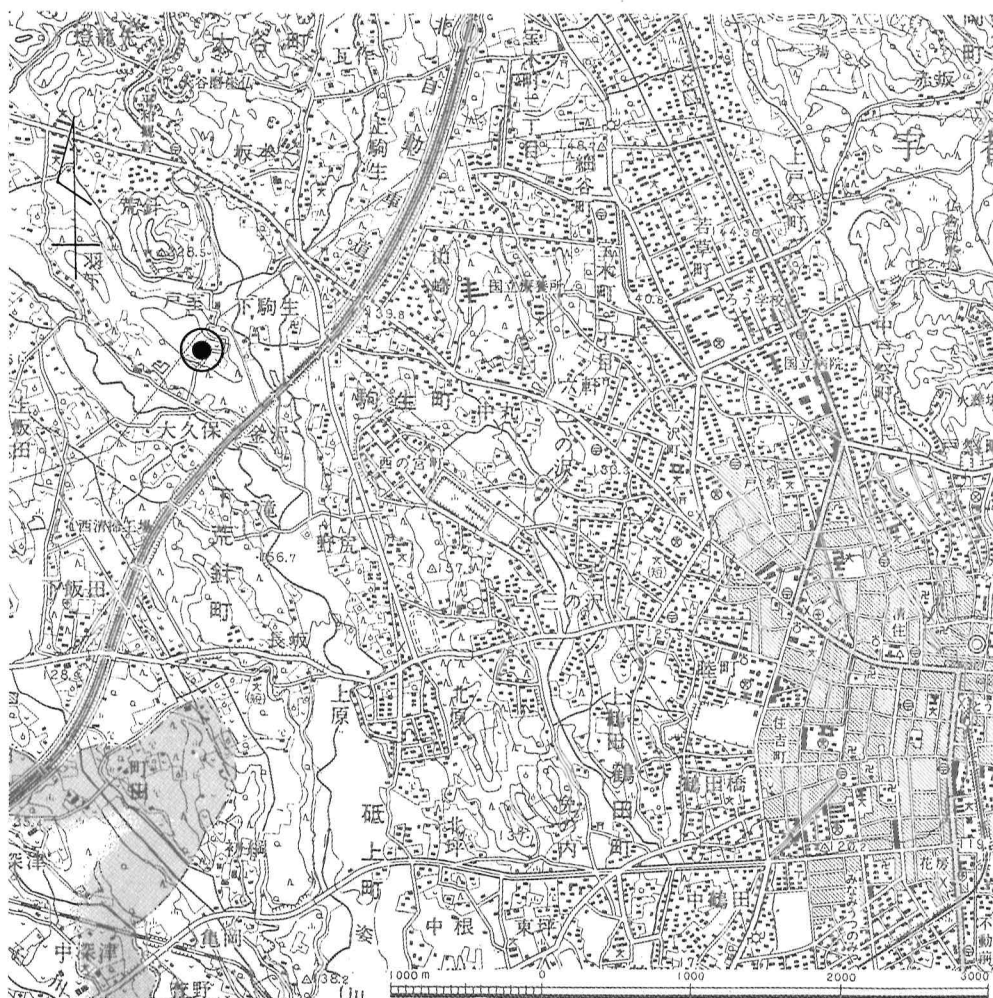
序 文	宇都宮市教育委員会教育長 後藤 一雄
例 言	
I 調査に至るまでの経過	4
1 上の原古墳群の保存と開発	4
2 8号墳の取り扱い	5
II 調査の経過	6
1 調査のねらい	6
2 調査経過の概要	6
III 古墳群の位置と環境	8
1 位 置	8
2 環 境	8
IV 8号墳の調査	10
1 発掘前の状況	10
2 周 溝	13
3 内部主体	13
(1) 玄 室	14
(2) 玄 門	14
(3) 羨 道	15
(4) 掘り方	15
4 出土遺物	16
(1) 縄文土器	16
(2) 土師器	17
(3) 須恵器	17
(4) 玉	17
V 6号・7号墳	18
VI まとめ	19
付 上の原8号墳付近出土の石器	21
図 版	22

I 調査に至るまでの経過

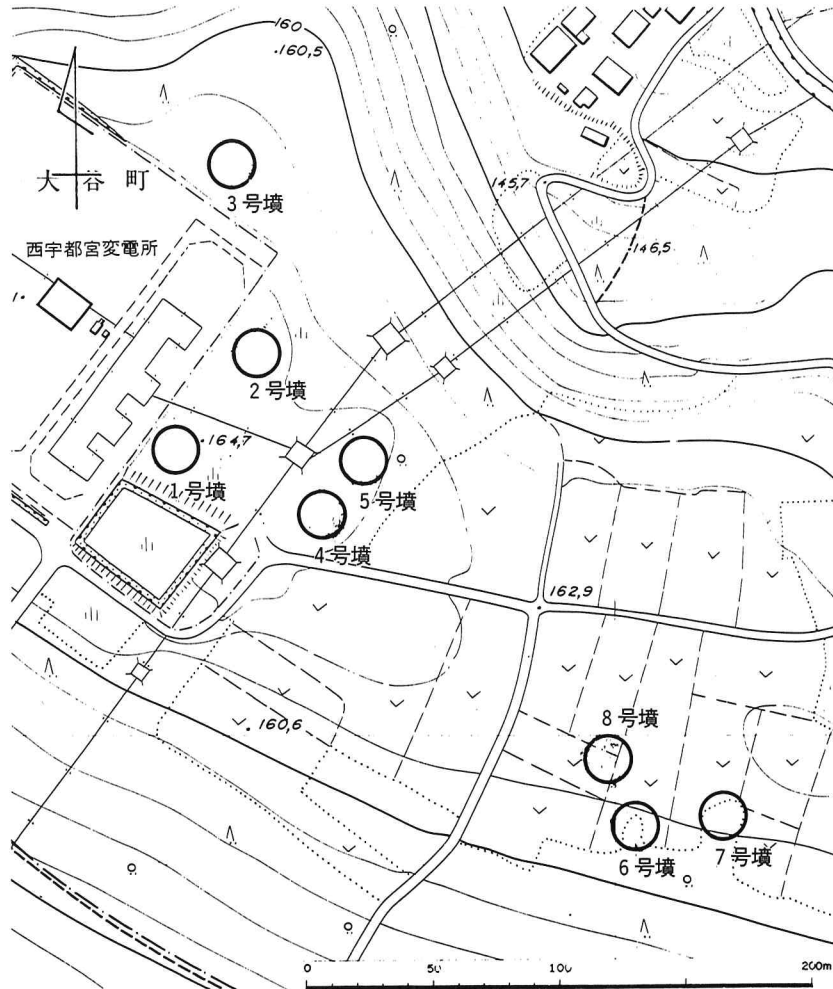
1 上の原古墳群の保存と開発

上の原古墳群は、本市西部の城山地区（旧城山村）が比較的古墳の分布が希薄な地区であるだけに同古墳群の北西に隣接する宗円塚古墳群と共に、その存在は注目すべきものであった。ところが、昭和56年この上の原古墳群内に東京電力（株）によって西宇都宮変電所が建設されることになった。当初の変電所建設計画では、上の原1号・2号墳は消失することになり2基の円墳を発掘調査し記録保存することもやむをえないとの考え方もあった。

しかし、宇都宮市教育委員会は埋蔵文化財保護を重視する立場から1号・2号墳を保存すべく東京電力と協議を重ねた結果、同社も理解を示し変電所の建設計画の一部を変更することによって2基の古墳は残存することになった。



第1図 上の原古墳群位置図



第2図 上の原古墳群古墳分布図

上の原1号墳は、墳丘南側に大きな盗掘跡があり、2号墳もその墳丘が大きく削り取られている古墳であったが、消失することなく変電所敷地内に現存している。なお、1号墳の保存にあたっては、盗掘跡を埋め墳丘に芝を張るなど修景することとした。上の原古墳群は、その文化財としての価値と共に埋蔵文化財保護と開発とのあるべき1つの姿を示す例として貴重な存在である。

このような状況下の上の原古墳群で、今回墳丘はもちろん主体部もほとんど破壊されてしまっている8号墳の存在が確認された。

2 8号墳の取り扱い

上の原古墳群は、これまで7基の円墳からなる古墳群としてとらえていたが、昭和59年畑を深く耕作した際古墳の石室が発見された。宇都宮市教育委員会は、同墳を「上の原8号墳」

と命名した。

上の原古墳群が所在する台地が畑として開墾された時期は定かではないが、明治時代にはすでに耕地になっていたとのことである。したがって、8号墳が墳丘を完全に削平され耕作に支障のある石室上部の石が抜き取られ、その姿を地表から消すことになったのはかなり以前と考えられる。その後、8号墳の存在は忘れられ、主に野菜や麦を栽培するただの畑として長く利用されていたが、昭和59年ゴボウの作付のため深く耕すことにより同墳の所在が確認されるに至った。

当教育委員会では、8号墳の取り扱いについて土地所有者と協議をした結果、石室を除去し耕地の有効利用を図りたいとの意向を尊重し、記録保存をする方針を定め発掘調査の準備を進めることとした。

II 調査の経過

1 調査のねらい

上の原8号墳を発掘調査するにあたり、同墳の状況を検討した結果、調査のねらいを次の3点とした。

- ・ 主体部の構造を明らかにする。
- ・ 古墳の平面規模を確認する。
- ・ 6, 7号墳の墳丘を測量する。

8号墳の主体部は、その下部しか残存していないことが判明していたが、この主体部の構造を記録保存することを本調査の最大の目的とした。また、墳丘が完全に削平されてしまっているが、周溝を検出し8号墳の平面規模を確認することを次のねらいとした。さらに、8号墳に隣接する6号、7号墳の墳丘を測量し、8号墳のかつての姿を類推する資料を得たいと考えた。

2 調査経過の概要

発掘調査は、昭和61年1月10日から3月3日にかけて実施した。

調査中降雪や地表の凍結・霜等に悩まされたが、冬期の発掘としては順調に進んだといえる。

調査経過の概要は、次の通りである。

- ・ 1月10日

土地所有者立ち合いのもとで、調査範囲を確認する。グリット（5m四方）を設定し基準杭を打ち込む。



降雪明けの調査初日

- 1月12日～23日

ベルト部分を残し、耕作土を掘り下げる。耕作土中から縄文土器片が出土する。地表から約40cm掘り下げたところで石室の側壁（西側）及び周溝の存在を確認する。

- 1月26日～30日

周溝を底部まで掘り下げる。東西・南北に設定したベルトのセクションを記録し、二本のベルトを取り除く。南側の周溝から提瓶（須恵器）・坏（土師器）の破片が出土する。

- 2月5日～13日

石室部及び羨道・前庭部を中心に調査する。

石室部は、西側壁が二段、奥壁及び東側壁が一段しか残存していないことを確認する。

- 2月16日～20日

石室内部と羨道部を精査する。

慎重に石室内の埋土を除去したが、遺物は皆無であった。石室床部一面に礫が敷かれていることを確認する。

羨道部床面の三枚の凝灰岩は、崩れ落ちたものではなく敷かれたものであることを確認する。

- 2月23日、24日

石室床面の礫を取り除き底部をローム層まで掘り下げる。石室構築の際の基本となったと判断される凝灰岩二個を検出する。

- 2月25日～27日

随時進めてきた図面取り、写真撮影を集中的に実施する。

隣接する6号墳、7号墳の墳丘測量を実施する。

- 3月2日、3日

石室部と羨道部の石を取り除き、掘り方を確認する。

土地所有者立ち合いのもとで、埋め戻し作業を実施する。



排土の様子



石室調査の様子



指導の様子

III 古墳群の位置と環境

1 位置

宇都宮市大谷町の「上の原古墳群」の位置は、東北自動車道の西側、通称大谷街道と鹿沼街道の間である。地形的には、鹿沼台地の東端の低丘陵で、東側を姿川西側を赤川に挟まれた台地上に立地している。なお、この両河川は、上の原古墳群の南約1kmで合流しており、同古墳群は舌状台地の端部に所在しているといえる。

古墳群の周囲は、東側が急斜面でその下を姿川が南流し、北は狭い谷状の水田を隔て戸室山(標高228.5m)へ、南と西は緩やかな傾斜で赤川兩岸の比較的広い水田地帯に続いている。

上の原の古墳群が散在する台地上は、比較的平坦で北西と南東が約400m、北東と南西が約150mの楕円状を呈しており、すべての古墳が標高160mから164m代に立地し、周囲の水田面との比高差は約30mである。

2 環境

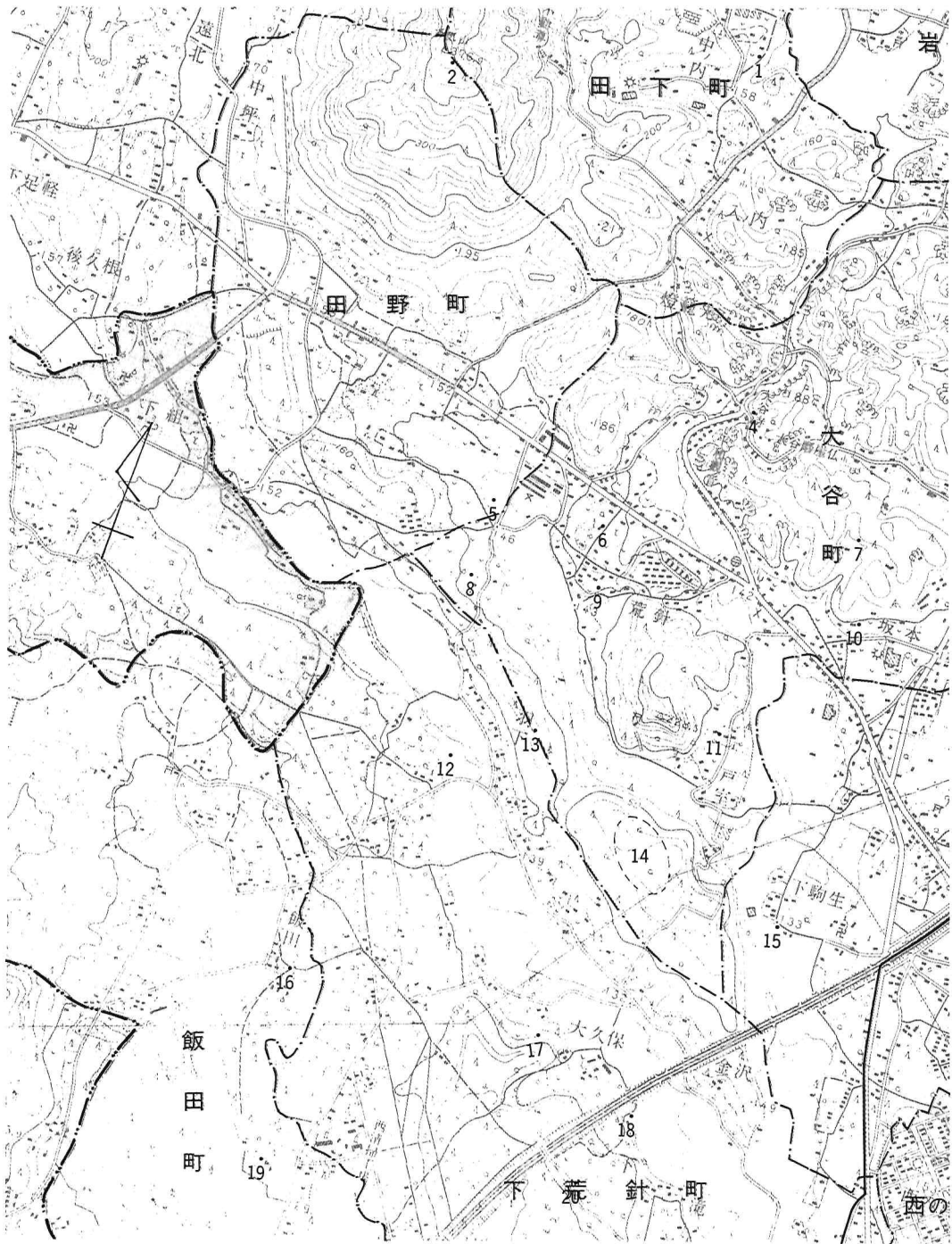
上の原古墳群は、比較的古墳の分布が希薄な宇都宮西部にあって、本古墳群の北西に隣接し同一古墳群としてとらえることもできる宗円塚古墳群(円墳4基)と共に貴重な存在である。また、本古墳群が位置する字上の原は、旧石器及び縄文時代の遺跡(上の原遺跡)が所在する地区として知られている。

上の原古墳群の周辺の古代遺跡として注目されるものとして、本古墳群の北西に所在する向山根・境木・漆久保・梅林の4集落遺跡がある。これ等の遺跡は、多気山(標高376.9m)の南東山麓に位置し盆地状の比較的平坦な地形にあり、いずれにも古墳時代の土師・須恵器片が散見できる。向山根遺跡については、狭少な面積であるが、2回発掘調査^{注1}が実施され古墳時代(和泉～鬼高期)の大集落が営まれた可能性を伺わせる竪穴住居群が検出されている。この4遺跡は、上の原及び宗円塚の両古墳群との関連を考慮する位置にある集落遺跡といえよう。

なお、上の原古墳群の北約2kmに、草創期の縄文式土器が出土したことで著名な大谷寺洞穴遺跡が所在することを付記する。

第3図に示した遺跡名は次の通りである。^{注2}

- | | | | |
|------------|-----------|----------|-------------|
| 1 佐宗前遺跡 | 2 多気城跡 | 3 日吉遺跡 | 4 大谷寺洞穴遺跡 |
| 5 向山根遺跡 | 6 漆久保遺跡 | 7 坂本高塚群 | 8 境木遺跡 |
| 9 梅林遺跡 | 10 羽黒古墳 | 11 上の原遺跡 | 12 羽下薬師堂裏古墳 |
| 13 宗円塚古墳群 | 14 上の原古墳群 | 15 中城跡 | 16 荒針高塚群 |
| 17 サルボ山高塚群 | 18 大久保遺跡 | 19 台耕上遺跡 | 20 宝性寺跡 |



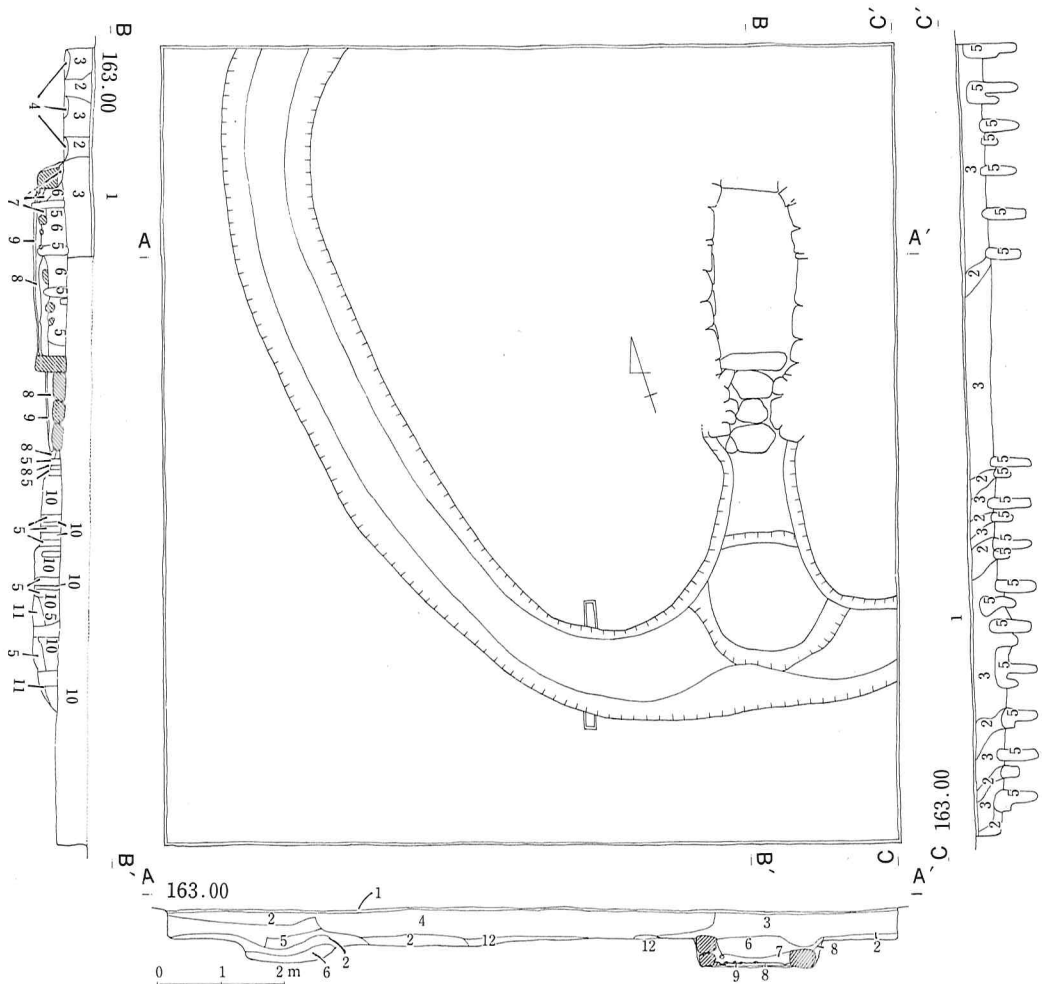
第3図 上の原古墳群周辺遺跡分布図

IV 8号墳の調査

1 発掘前の状況

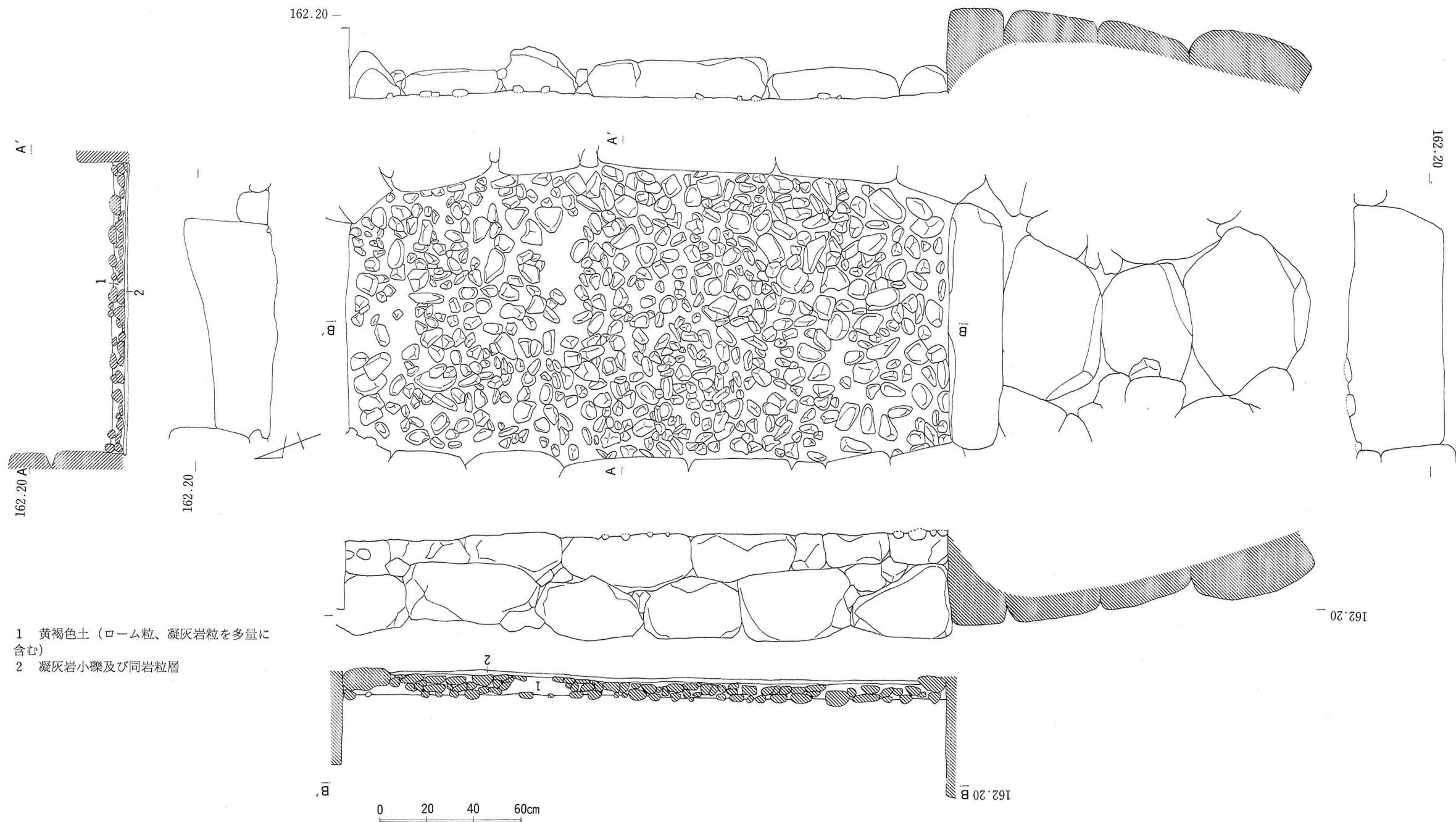
前記した通り上の原8号墳は、墳丘を削平し長く畑として耕作していたため、その高まりをまったく認めることができない状況にあった。

しかし、内部主体の位置がおおよそ推定できたので、第4図を調査範囲とした。この範囲は、暫定的に設定したものであり、必要があれば西側と南側を拡張して調査することを考えていたが結果的には同範囲内で納まることになった。



1 黒色土（表土） 2 黄褐色土（トレンチャーによる攪乱） 3 黒茶褐色土 4 茶褐色土 5 黒色土（トレンチャーによる溝） 6 茶黄褐色土（凝灰岩小礫，ローム粒を含む） 7 黄褐色土（凝灰岩小礫，ロームブロックを含む） 8 黄褐色土（ローム粒，凝灰粒を多量に含む） 9 凝灰岩小礫及び同岩粒層 10 茶黒褐色土（ローム粒を含む） 11 茶褐色土（ローム粒，同ブロックを含む） 12（暗茶褐色土）

第4図 遺構全体図



第5図 石室実測図

2 周溝

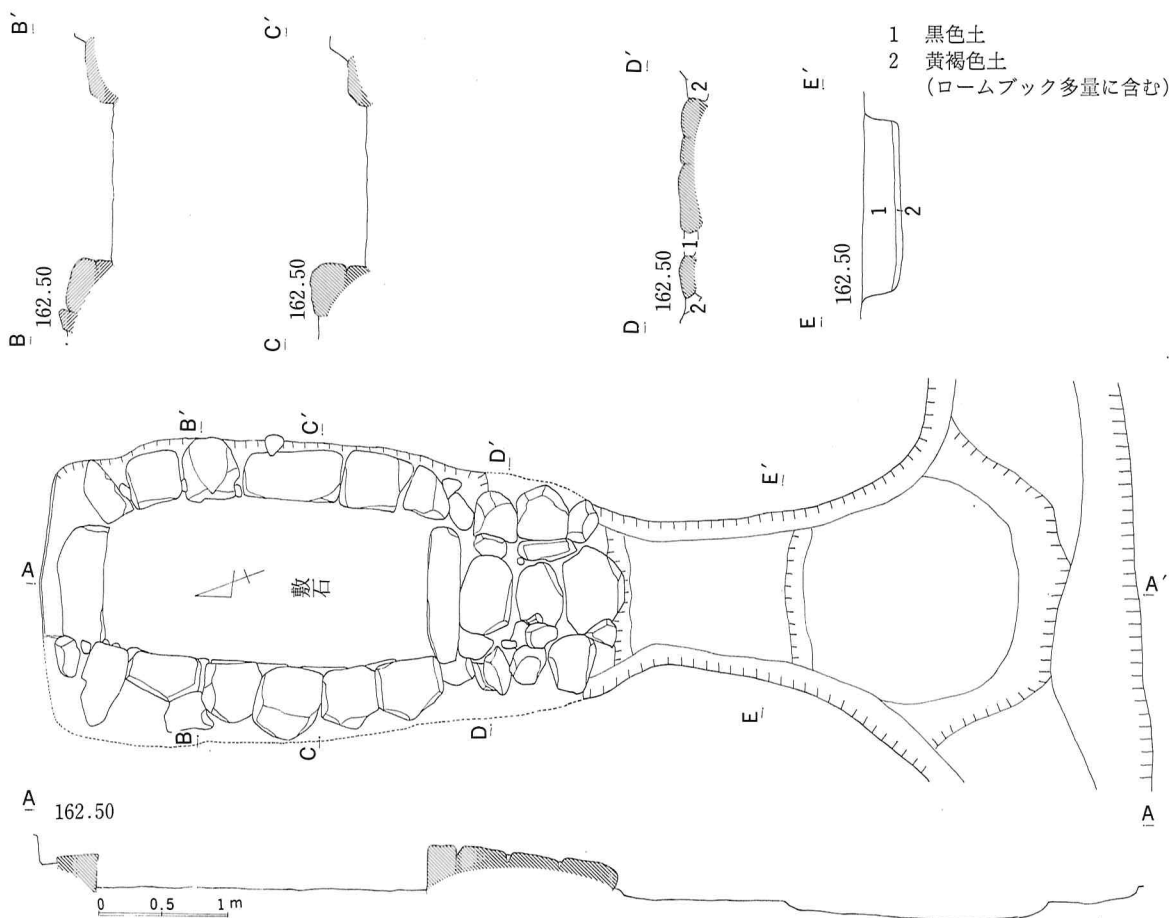
周溝は、地表から耕作土を約40cm掘り下げた面で確認することができたが、ここはすでにローム層直上であり、ゴボウ以外の野菜の栽培においてもかなり深く耕やしていたことを伺わせるものであった。しかも、この面には東西に深くゴボウ栽培のためのトレンチャーによる溝跡がしま模様になって残っていた。

したがって、周溝はその底部しか残存しておらず、その状況は部分的にやや異なるが平均すると幅1.5m、深さ30cmである。検出した周溝から、8号墳は整円型の周溝を持つ円墳であったことが推定できた。また、この周溝の内側は主体部の南側で同部分に向ってハの字状に広がり羨道部に続くことが確認できた。

なお、今回調査した周溝は約17m（外側）であり、本周溝が整円形であるならば全体の約3分の1にあたる。

3 内部主体

本墳の主体部は、横穴式石室であり石室の中軸線はN-16.5°-Eであるが南に開口してい



第6図 主体部全体図

るといえる。

前記した通り周溝をすべて検出していないので定かではないが、この石室の奥壁は本墳の中心に位置することが推定できる。なお、石室の壁の上部及び天井石は、墳丘を削平する際取り去られたものと思われ、残存しているのは石室の下部のみであった。

(1) 玄室

玄室の平面は、僅かな胴張がみられる長方形である。規模は、中軸線上の長さ2.51m、幅は奥壁部で0.88m、玄門部1.02m、最大幅1.26m（奥壁から0.95m南）である。

石材は、両側壁及び玄門部の仕切り石が凝灰岩であるのに対して、奥壁は流紋岩系の割り石が使用されている。東側に2段、西側に1段残る凝灰岩の側壁は、小口をやや彫整した程度の割り石によって構築されているが、大きさはさまざまである。

なお、側壁の石の透き間には、凝灰岩及び奥壁の石と同質の小礫をクサビとして用い壁の安定を保っている。

玄室床面は、上の原古墳群が所在する台地の南西を流れる赤川の小礫が全面に敷かれている。この敷石の下は、約2cmの厚さで粒状の凝灰岩がローム層の上に固く敷きつめられている。なお、床面の敷石の下に奥壁と間仕切り石に接して凝灰岩がローム層に埋め込まれるように置かれている（第8図）。

玄室について特記すべきこととして、次の2点があげられる。

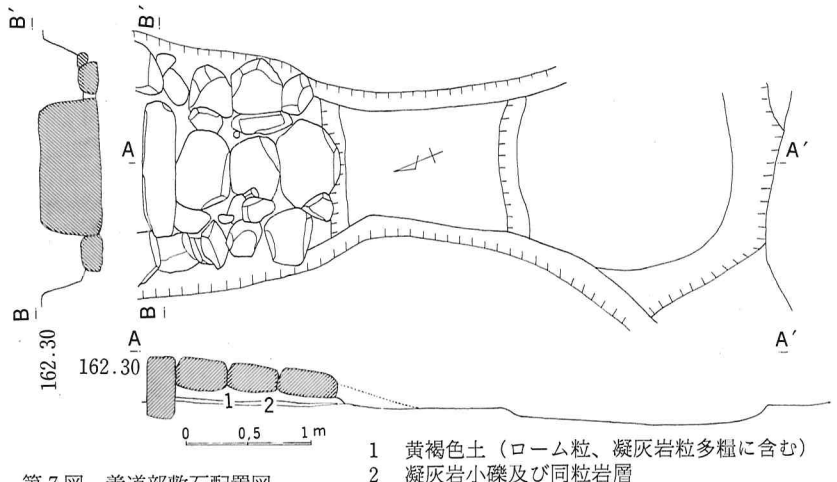
- ・上の原古墳群周辺は、豊富に凝灰岩を産する土地でありながら、一段だけであるが残存する奥壁が流紋岩系の石であること。
- ・玄室の平面の長径が、最大幅の2倍になっており、その長径の両端、床面の敷石の下に置き石が認められたこと。

(2) 玄門

玄門の遺構としては、玄室と羨道を間仕切る横幅約1m、高さ約50cmの台形状の凝灰岩

だけしか残存していないが、この仕切り石の両側に玄門柱が存在していたと推定される抜き取り穴が認められる。

玄門関係で注目すべきこととしては、仕切り石の上部が羨道の敷石とほ



ほ同じ高さであるのに対して、玄室床面からは35cmも高くなっていることがあげられる。

(3) 羨道

羨道の平面規模は、長さ1.3mで幅0.5m前後と考えられる。

羨道の床面には、玄室との仕切石に接して南に3枚の扁平な凝灰岩が敷かれている。この3枚の石は、やや大きさが異なるが仕切石に接する石の上部を仕切石の上部にそろえ南下がりになり並んで羨道から周溝へなだらかに続いている。なお、3枚目の敷石の南に接する落ち込みは、ゴボウ栽培時のトレンチャーによるものである。

敷石の下は、凝灰岩の小礫混りのローム、更にはその底部には玄室床面と同じ状態で粒状の凝灰岩が敷かれ3枚の敷石を支えている。

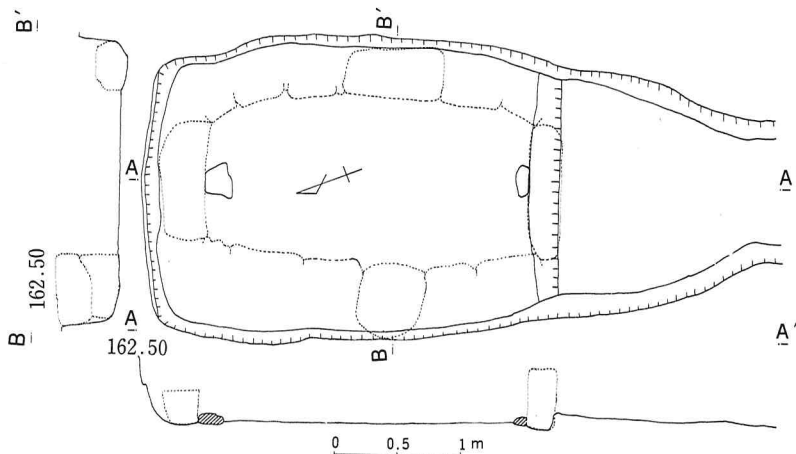
この3枚の敷石の両側には、敷石とほぼ同じ高さで玄室の側壁から続いて凝灰岩の割り石が認められる。この石は、一応側壁の最下段部と考えられるが、玄室の側石よりも石に大小のばらつきがあるだけでなく、原位置を保っていると考えられる石をみても並び方が乱れている。

このことから、羨道部の壁は当初から立ち上っていなかったか、積まれていたとしても形式的なものであり、天井石は存在しなかったと推定される。

(4) 掘り形

掘り形は、ローム層に掘り込まれた部分で見ると、石室を構築するために必要最小限の範囲である。その規模は玄室で南北3.3m、東西の最大幅2.4mである。

8号墳が築かれた地形は、南にやや傾斜しており主体部の掘り形全体も奥壁から羨道方向に地形どおり傾斜している。これに対して、掘り形床面は、逆に北の奥壁に向ってやや下って掘り込まれている。更に前記したことであるが、玄室床面の奥壁と仕切石に接する位置にあった2個の凝灰岩は、ローム層をわずかに掘り込んで置かれたものであることが確認できた。



第8図 主体部掘り形全体図

4 出土遺物

(1) 縄文土器

今回の調査では総数23片の縄文土器が出土した。大半が小破片であり、磨耗も著しいものが多いため、ここでは図示可能な8片のみを記載するにとどめることにする。

1は波状で浅く内湾する口縁部である。口縁内側は厚く肥厚し、しっかりとした稜をもつ。また口唇部には幅約2mm程の浅い刻み目が連続して施文されている。口縁部に平行して角押文が施されているが、3列とも同一の丸みを帯びた棒状工具(幅約2.5mm)によるものと思われる。器面にはR・Lの単節斜縄文が施文されている。胎土には白色砂粒を混入する。

2は胴部の破片である。平行した2本の横位の沈線を施文した後、その両側に細い円形竹管より刺突を加えることで鋸歯状文の効果をねらったものであろう。胎土には白色砂粒を混入する。

3は胴部の破片でL・Rの単節斜縄文が施されている。胎土には白色砂粒を混入する。

4は内湾する口縁部の破片で、口縁部に平行して1列、斜めに3列、先端を斜めにそいだ半截竹管による有節線文が施文されている。また口唇部には約5mmの間隔で刻み目が施されているが、これらは全て同一の工具(幅約4mm)によるものであると思われる。胎土には白色砂粒を混入している。

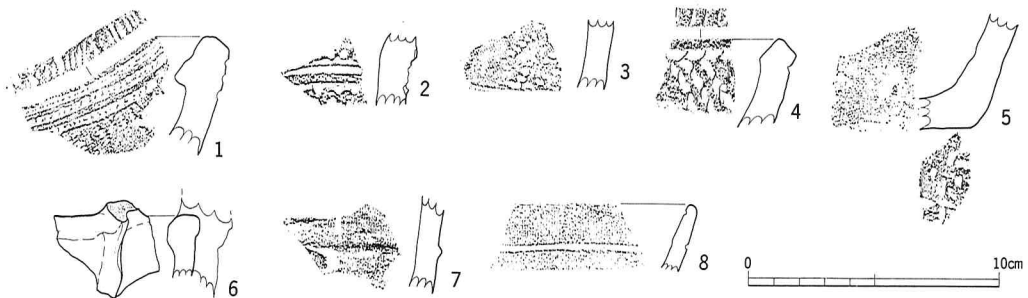
5は底部の砂片で、底面には「2本超え、1本潜り、2本送り」の網代の圧痕をもつ。胎土には2～6mm程の粒の粗い白色砂粒の他、若干の雲母を混入している。

6は口縁部に粘土を貼り付けてつくられた扇状把手の一部と思われる。胎土には雲母、砂粒を若干混入し、焼成はあまりよくない。

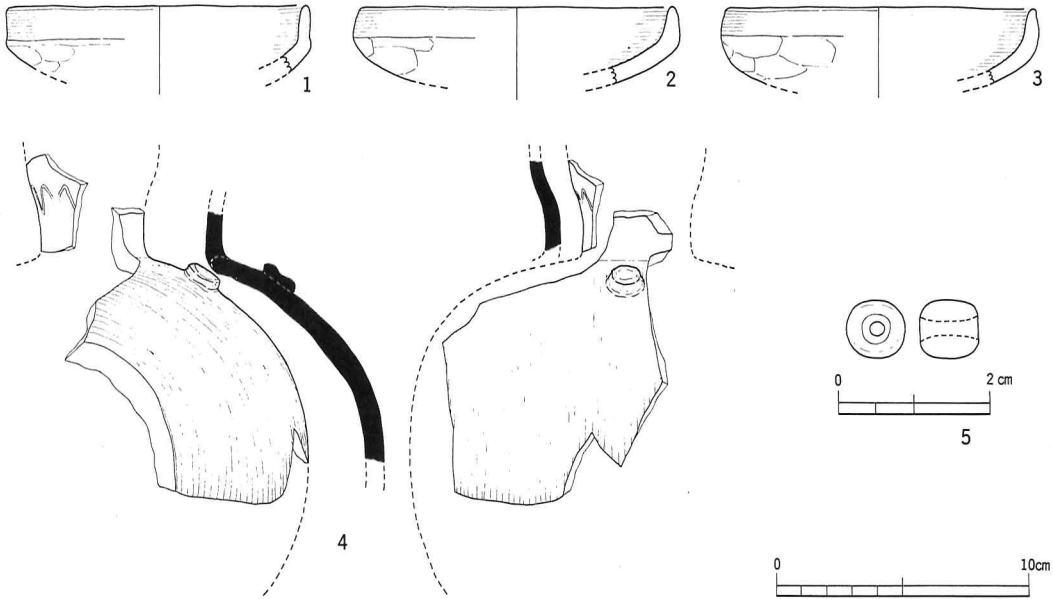
7は胴部の破片で、区画文乃至Y字状文を構成する断面三角形の隆起帯の一部。胎土には多量の白色砂粒、雲母を混入する。

8は口縁部の破片である。内面に沈線をもち、口縁部に平行して2本の沈線が施され、その間にL・Rの単節斜縄文を施文している。

1・2は五領ヶ台式に比定でき、3も1・2と同様の胎土・焼成であることから五領ヶ



第9図 出土縄文土器



第10図 8号墳出土遺物

台式であると思われる。4～7は阿玉台式Ⅰ～Ⅱ式，8は堀ノ内2式に比定できる。

(2) 土師器 (第10図1～3)

いずれも周溝の覆土中から出土した坏の破片である。1～3とも小片のため推定復原ではあるが、口径が12cm前後と小さめで、また器高も浅めのようなものである。器形的には1が口縁部外面に比較的明瞭な稜を残しているのに対し、2、3は僅かにつまみ上げられたような口縁部形態である。

調整の手法は3点とも共通しており、口縁部および内面全体が横ナデ、体部から底部にかけての外面向へ削りである。なお、色調は1・3が淡褐色、2が赤褐色であり、胎土中にはいずれも微砂粒が混入している。

(3) 須恵器 (第10図4)

前底部から周溝にかけて、5・6点の小片となってばらばらに出土したものであり、出土層位はいずれも覆土の下層である。図示したように器形はおそらく提瓶と思われるが、側面は通常のもののように偏平な形態をとらず、横瓶を思わせるようなふくらみをもつものとみられる。

頭部には一条のへら描き波状文が配され、肩部には径1.5cm、厚さ4mmのボタン状把手が付されている。また残存する胴部外面全体にはカキ目調整が施されている。

胎土には2～3mmの砂粒が若干含まれているが、焼成は良好である。色調は青灰色であり、胴部上半から肩部および口縁部内面には自然釉が付着している。

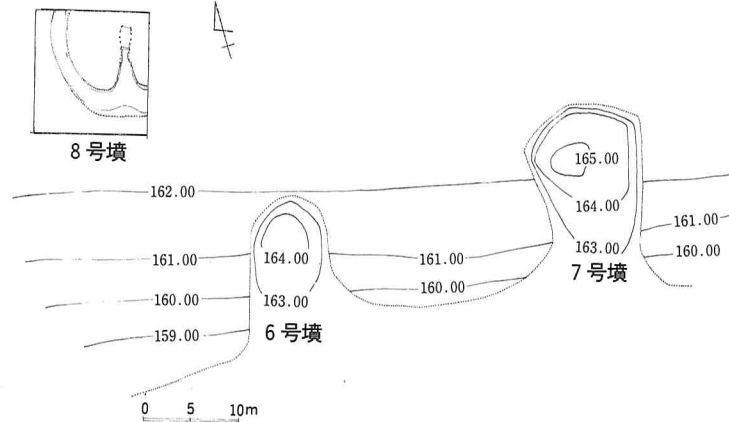
(4) 玉 (第10図5)

径8mm, 厚さ8mmの土玉であり, 径1.5~2mmの孔があけられている。色調は灰白色で, 非常に軟質でもろいものであるが, おそらく表面は漆塗りであったものとみられる。

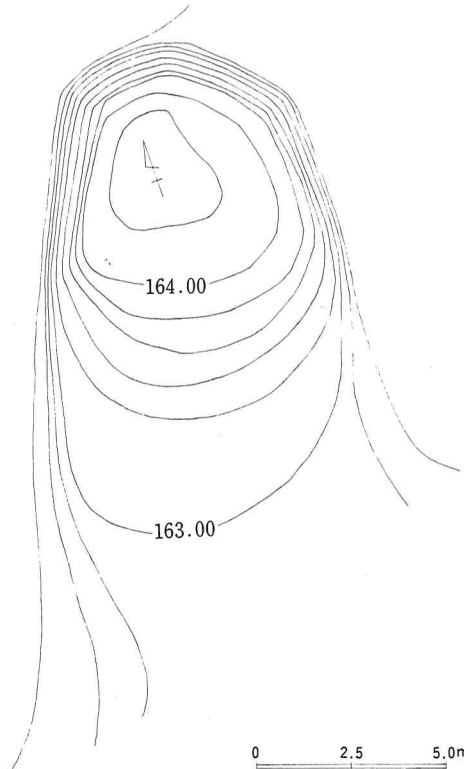
V 6号・7号墳

上の原8号墳に隣接する6・7号墳は, 2基とも南側以外の3方の墳丘を大きく削られているが, 墳頂部は残存しているので墳丘測量を実施した。

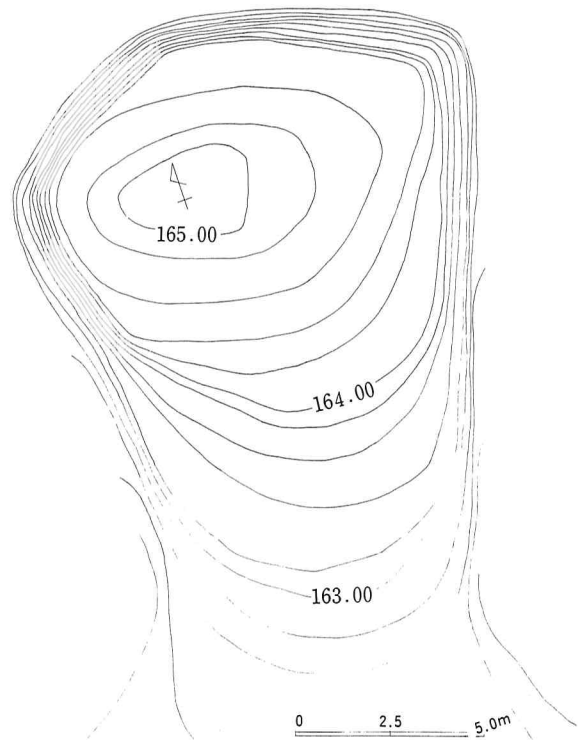
2基の墳丘は, 8号墳が墳丘を完全に失ってしまった状況にある現在, その規模を類推する資料といえよう。



第11図 6・7・8号墳位置図



第12図 6号墳実測図



第13図 7号墳実測図

VI まとめ

今回の上の原8号墳の発掘調査で判明したことを要約すると、次の通りである。

1 墳丘規模

墳丘を完全に削り取られているので、平面規模以外は定かではないが6・7号墳の実測結果を含め推定すると次の通りである。

- ・ 平面規模は、周溝の外側で径約17mのほぼ整円形の古墳である。
- ・ 墳丘の高まりは、周溝最上部から約1m～1.5mの間の古墳であると類推できる。

2 内部主体

内部主体は、耕作により攪乱しているが次の事柄が確認できた。

- ・ 主体部は、横穴式石室で墳丘中心部から南に開口している。
- ・ 石室は、奥壁を除いて古墳所在地の周辺に産する凝灰岩の割り石を使用している。
- ・ 玄室の平面規模は、長径対短径の割合が2：1である。
- ・ 玄門柱は残存していないが、柱が立っていたことが類推できる。
- ・ 羨道は、凝灰岩3枚を敷石としている。
- ・ 掘り形から内部主体は、半地下式といえる。

3 築造時期

8号墳の築造時期は、同墳に伴う出土遺物が土師器・須恵器片及び玉しか検出されなかったので定かでない。しかし、この数点の遺物から考察すると、本墳は7世紀代に築造された円墳といえる。

※ 注

- 1 第1回発掘調査（昭和58年） 第2回発掘調査（昭和60年）である。
- 2 「宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書・宇都宮の遺跡」（昭和58年・宇都宮市教育委員会）より作成。
- 3 宇都宮市文化財調査員、高山伝治氏の御教導による。

付 上の原 8 号墳付近出土の石器

津布樂 一樹

本資料は、松島清氏が昭和61年6月14日、上の原古墳群8号墳付近(宇都宮市大谷町1653・第1図参照)を耕作中に発見したもので、氏の御厚意によりここに発表させていただく次第である。

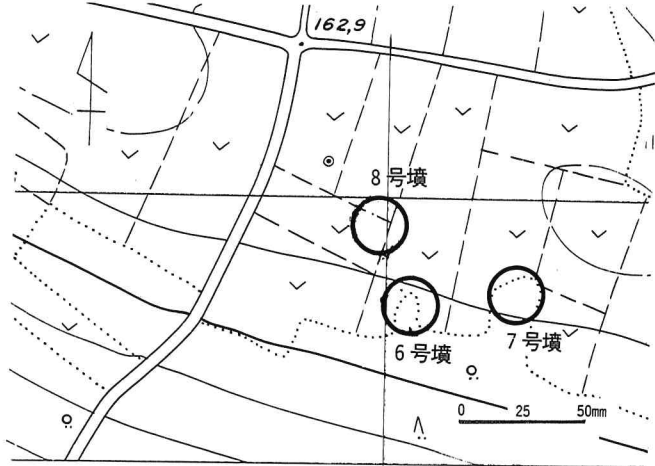
石器は完形品であり、鎌状の形状を呈する。表面の一部に第一次剥離面を残す他は、全面に押圧剥離が施され、つまみ状の作り出しの部分を除く周縁部全てに刃部の形成が行われている。また、周縁部には更に小

さな剥離面が形成されており、刃部の再形成が行われたものと思われる。全長10.0cm、全幅6.4cm、厚さ1.1cmを測る。重量58.3g。石質は赤色で強い光沢をもつ流紋岩であり、只見川流域に産する「赤玉」に類似するが、産地は不明。

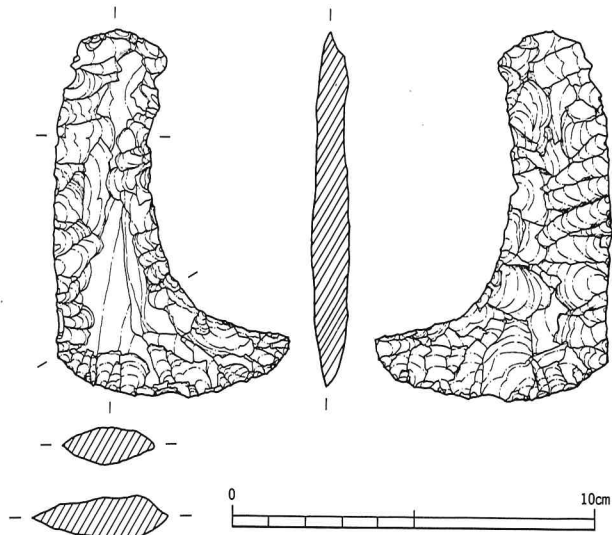
本例は形状、石質ともに現在のところ管見に触れ得ず、用途については不明である。ただし、つまみ状の作り出しをもつことから、石匕の一種かと思われる。

なお、帰属時期は、発見地付近に前期末から中期初頭の土器の散布がみられることから、概ねこの時期の所産と考えられる。

最後になりましたが、小稿をまとめるにあたり適切な御指導を下された栃木県立博物館、上野修一氏に深く御礼申し上げます。



第1図 石器出土位置



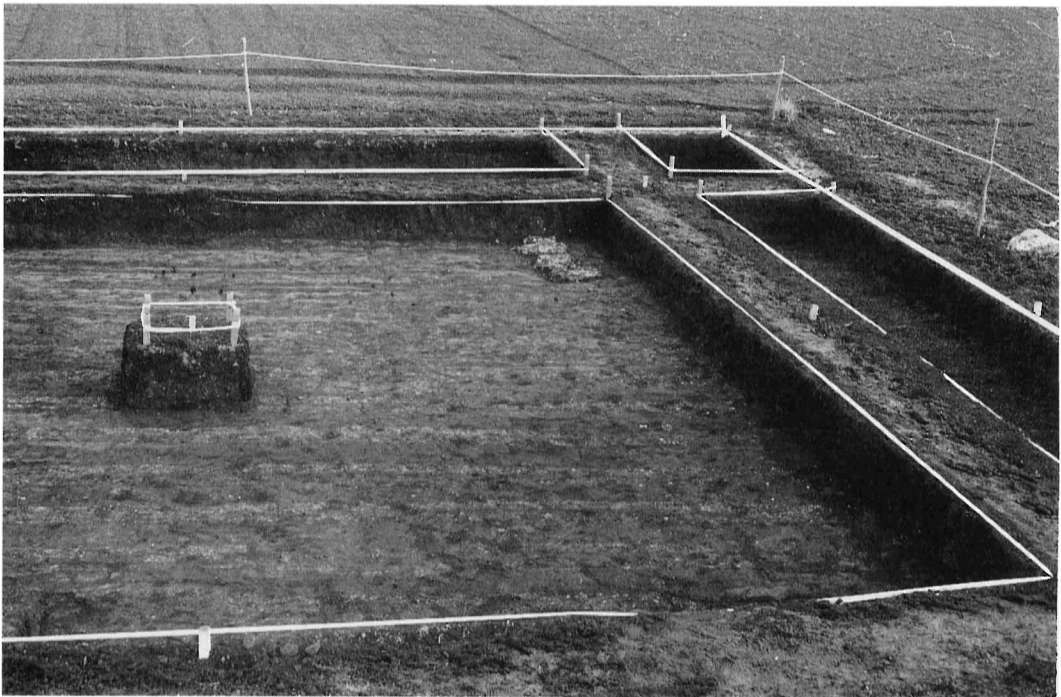
第2図 石器実測図

図 版



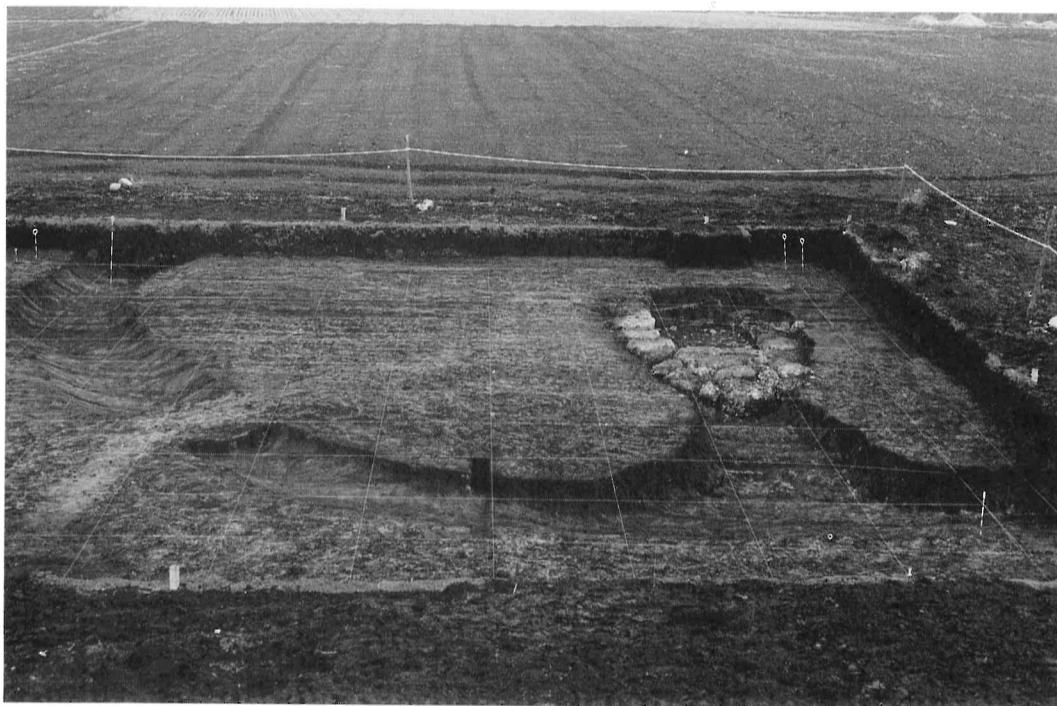
発掘調査前（北から）

PL 1



排土状況 1（南から）

PL 2



排土状況2（南から）

PL 3



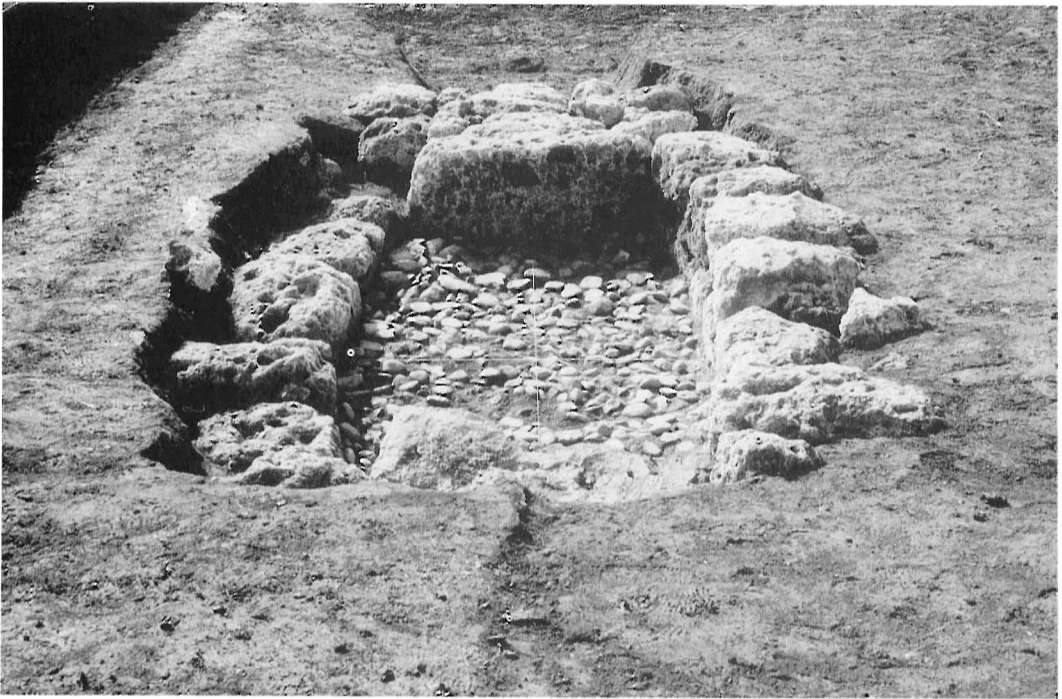
主体部確認状況（西から）

PL 4



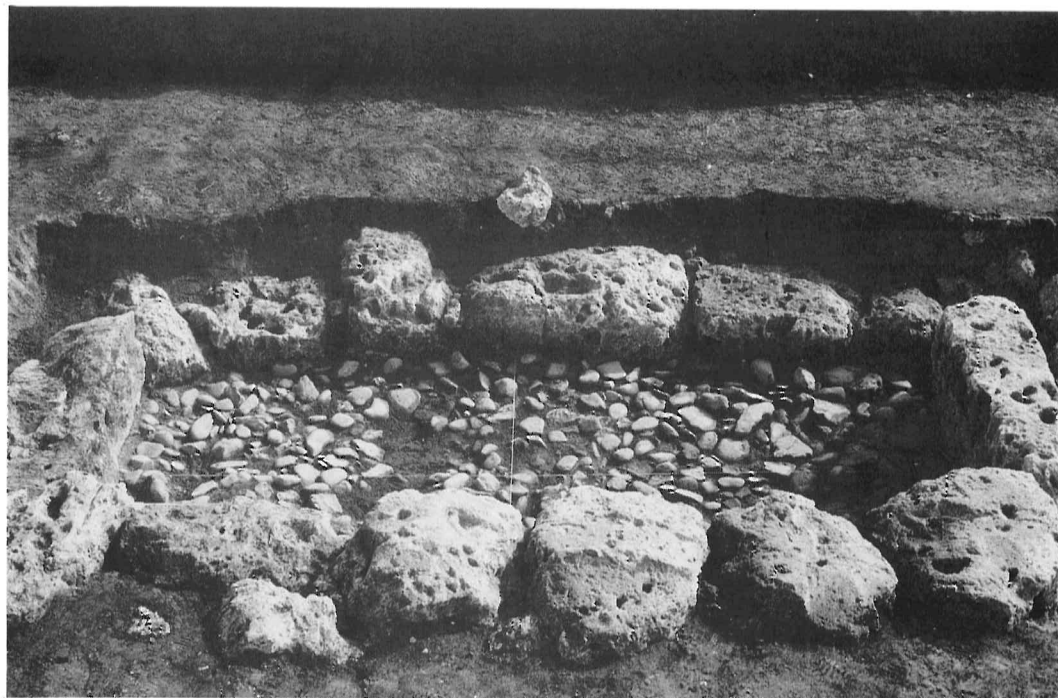
主体部セクション (南から)

PL 5



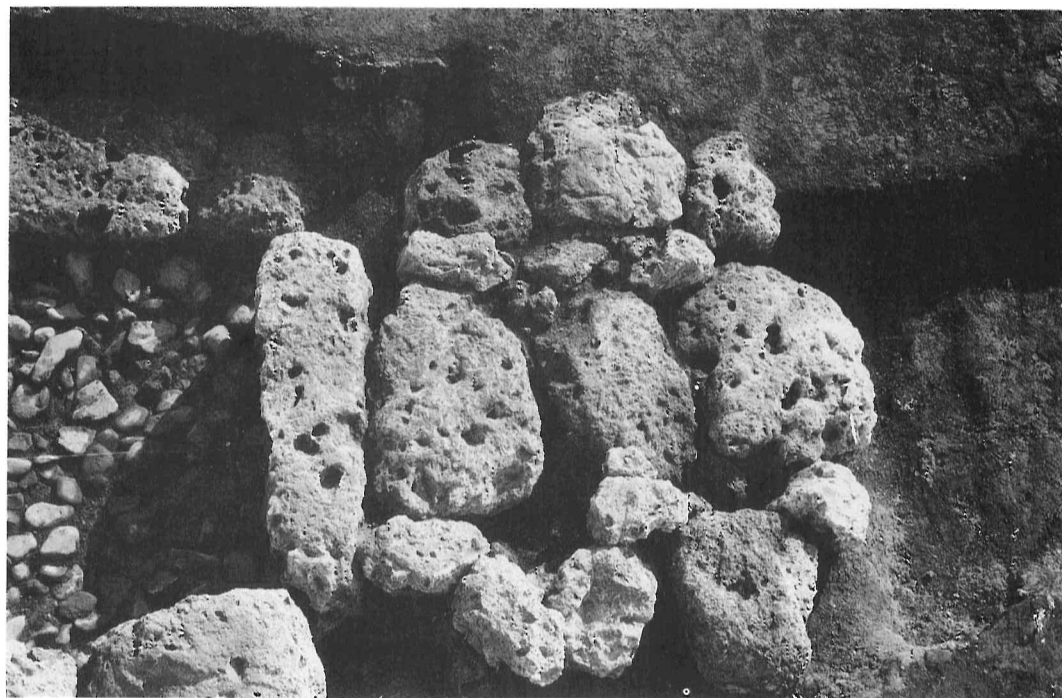
主体部全景 (北から)

PL 6



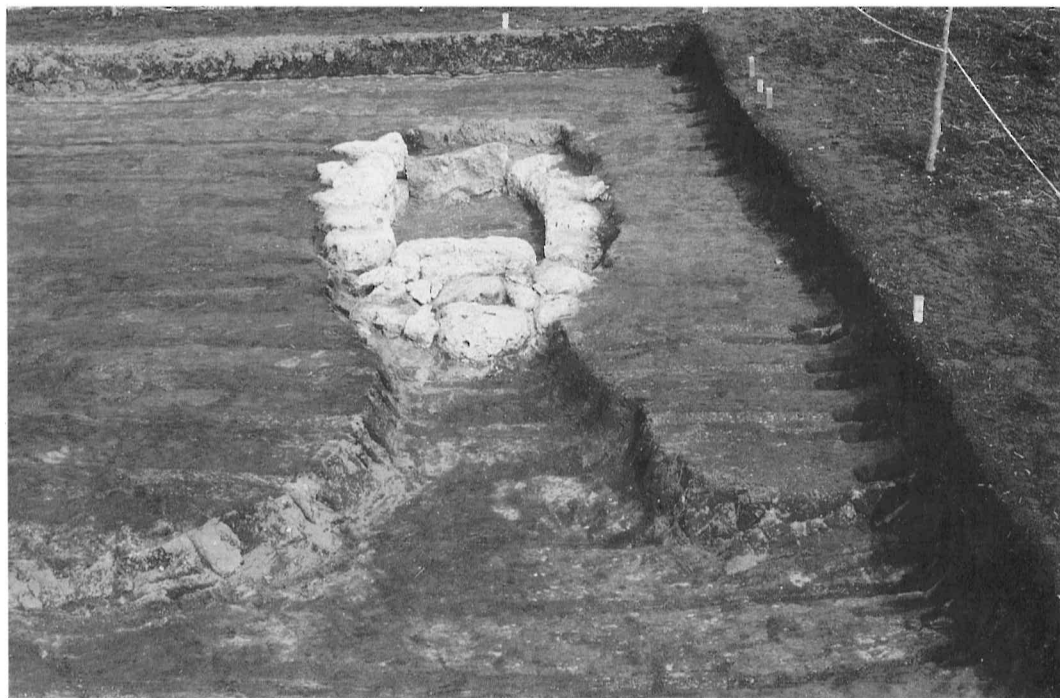
玄室部全景（西から）

PL 7



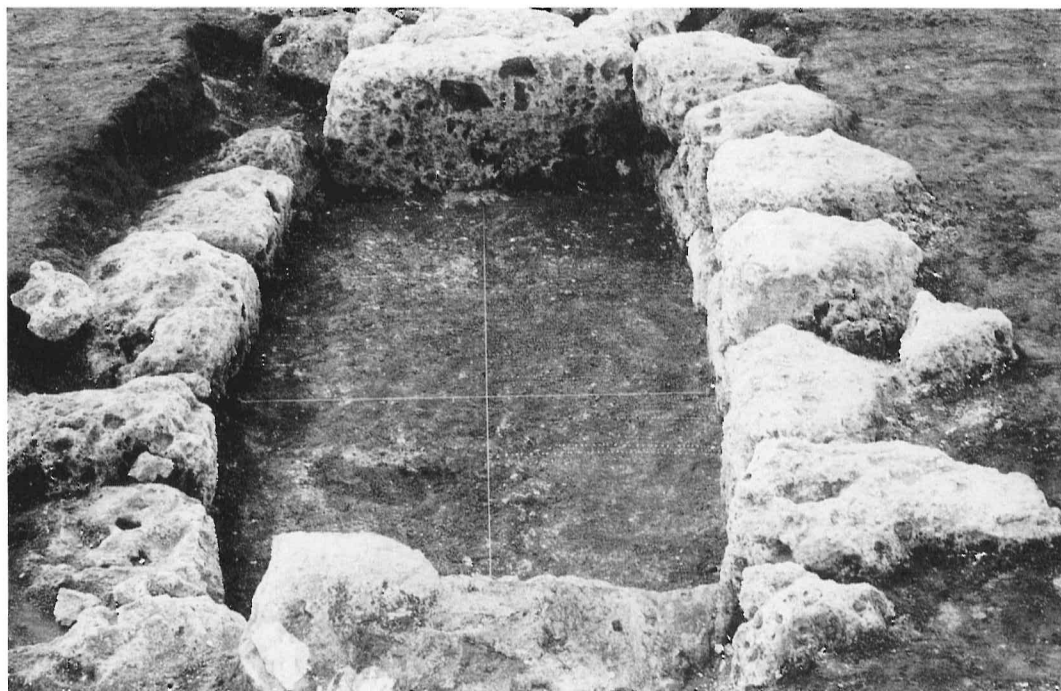
羨道部敷石（西から）

PL 8



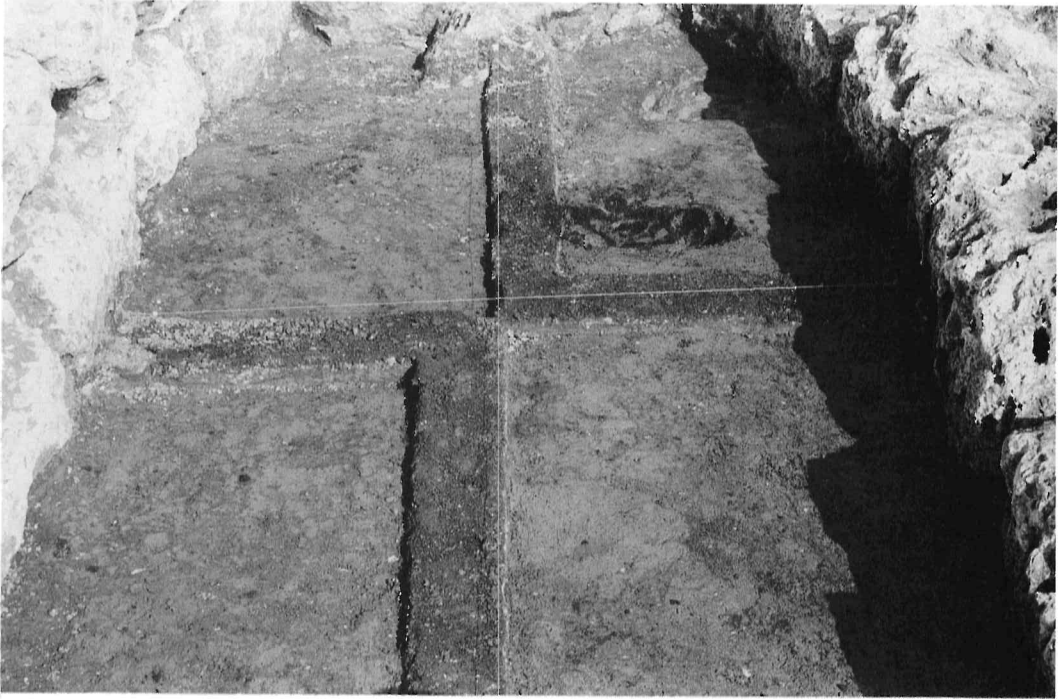
周溝部（南から）

P L 9



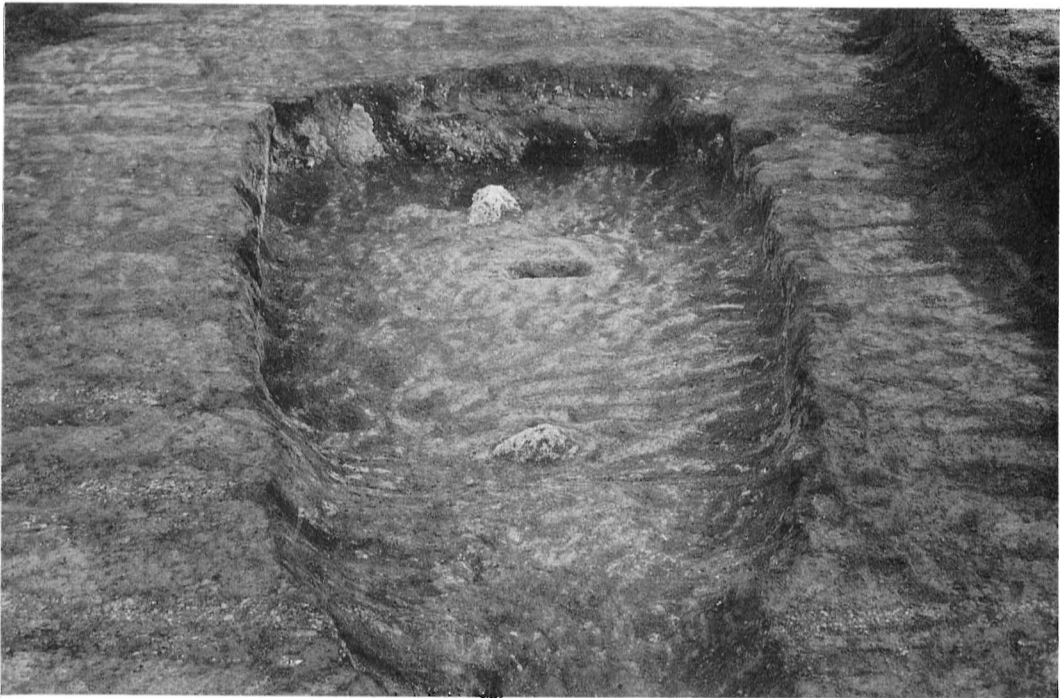
玄室床面1（北から）

P L 10



玄室床面2 (南から)

PL11



主体部掘り方 (南から)

PL12



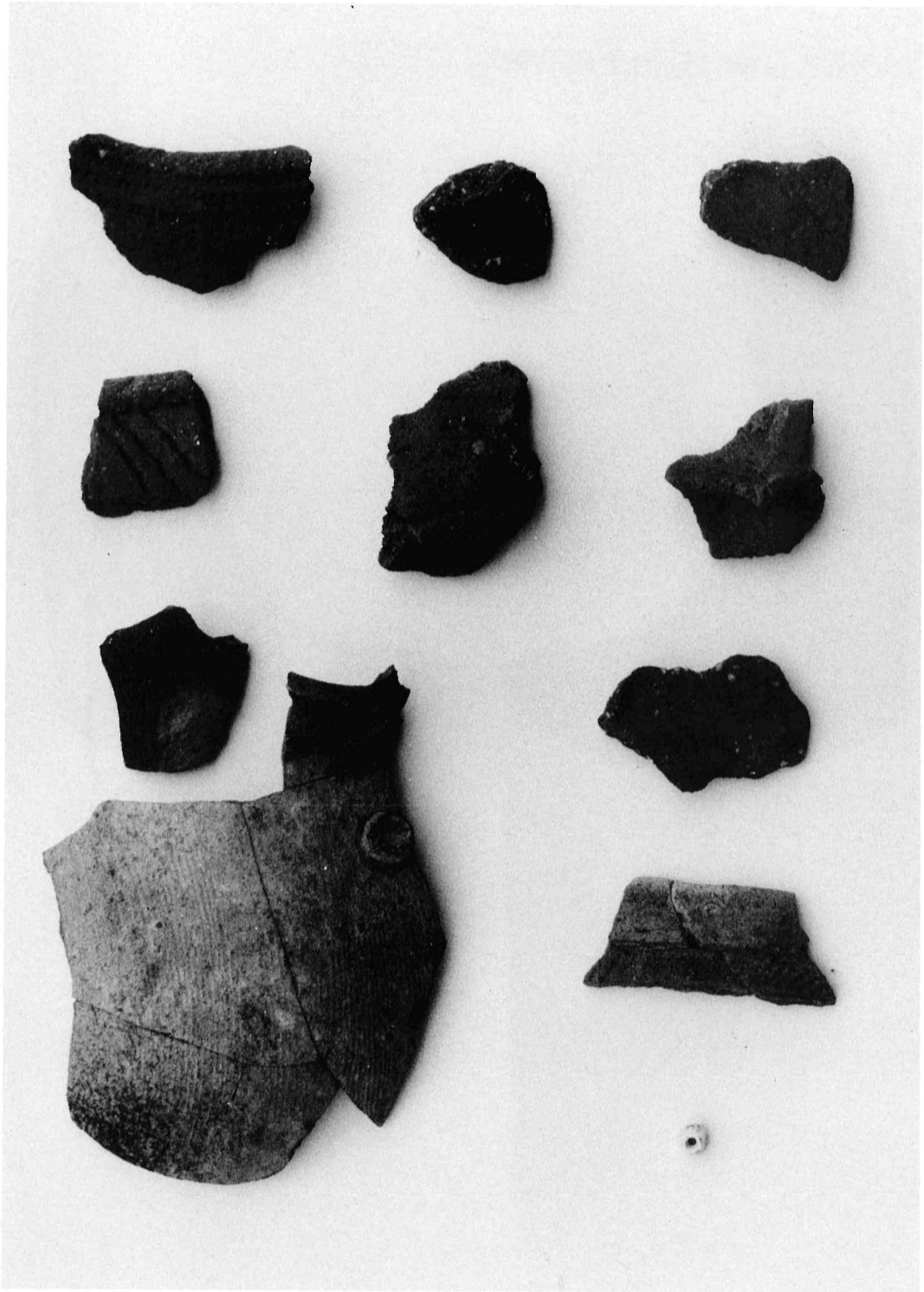
上の原 6号墳 (西から)

P L 13



上の原 7号墳 (西から)

P L 14



出土遺物

PL15

上の原 8 号墳付近出土の石器



PL16